

南太平洋に桜散る―
幻の叔父・山岸昌司を追って

第三章

乙飛六期 故 山岸昌司 様
姪 平林 峰子

平成二十六年八月Aさんから手紙が届きました。

手紙には 本屋に立ち寄った時、大変なものをみつけてしまいました。」と、もうひとつの「永遠の0』筑波海軍航空隊―散華した特攻隊員たちの遺書」という本の「コピー」が同封されてありました。

その本には当時筑波航空隊の教員であった叔父が椅子に座り、後ろに4人の乙飛九期の練習生が立っている写真が掲載されていました。この写真は、私が提供したものでしたが、提供した時には、この人たちを教えていたんだ位にしか考えていませんでした。

Aさんからの手紙には四人のお名前が書かれてありました。

左から大石芳男さん、高島巖さん、阿部健市さん、上原定夫さんという事でした。

筑波海軍航空隊勤務当時の様子が叔父の日記には以下の様に書かれています。

叔父の日記より。

一月六日。

練習開始、練習生操縦が荒いが、

今日一日は休暇もらったばかりなので黙っていた。操縦そのものは休暇前に比べて殆ど変らない。皆俺の言う事を良く聞いてしまっているらしい。

一月七日。

午後単独を許した。少しも危なくはなかったが、まだAとTには安心できぬ。

一月二十一日。

本日よりロール始める。一人〇回として〇人だからたまらない。終りごろにはくたくたになってしまう。

練〇も初めてなので青くなっていた。一人T公だけは操縦の邪魔を思う存分しておきながら何ともないところりとしていた。全くあきれてしまう。

こんな思いをしながら、筑波で練習生を教えていたんだと、写真を見ながら元気だった頃の叔父の姿を想像しています。

話は変わりますが、平成二十六年十一月の終わり、北海道の親戚に安曇野のリングを送るためふと立ち寄ったリング園の店先で、あるおばあさんと不思議な出会いをしました。

私が、お元気ですねえ、おいくつですか。」と尋ねると、そのおばあさんは九十四歳です。」と答えてくれました。

思わず 私の母の弟も生きていたら九十四歳ですが、海軍のパイロットで、南太平洋で戦死しました。」と

話をすると、おばあさんはリング園の選果の手を止めて 私の弟も海軍に入ったが戦死したんですよ。昔はよく靖国神社にお参りに行ったが、今は歳で行かれないんですよ。でも、東京にいる妹が靖国神社によく行って来ています。」と話して下さいました。

私が 来年、慰霊祭に靖国神社に行きますので、是非妹さんにお会いしたいです。」と言うと、すぐ自宅に戻って東京の妹さんに電話してくれました。

年が明けた、平成二十七年二月りんご園のおばあさんから電話があり戦死した弟は安曇野出身で米倉康男と言います。私はもう東京にはいられないから、妹の住所と電話を教ええますから連絡してください。」と言われました。さっそく東京在住の妹さんに電話をし、事情を話したところ 私は高橋銀子と言います。兄の事を書いて手紙を出します。」と言われ、しばらくすると手紙が届きました。

その手紙には 兄は、皇族で伯爵藤堂高虎の子孫で藤堂高松の書生を努めていましたが、軍隊を志願し、昭和十八年四月十四日飛行操縦士としてニューギニアポートモズビーにて戦死しました。母と私達姉妹弟は声を上げて泣いたことを今でも忘れることができせん。母が本当に可哀想でした。」と書かれてありました。

それから高橋さんとは電話での交流が続きましたが、米倉さんが所属していた第七〇五海軍航空隊の遺族会はもう解散してなくなり寂しいことずすと話しておられました。私は、この年の三月に靖国神社で行われる豫科練雄飛会主催の慰霊祭に参加を予定しておりましたので、早速雄飛会本部に高橋さんへも案内状を送ってくださいようお願いしました。

そして、平成二十七年三月二十九日の慰霊祭の日、高橋銀子さんとお会いできるのを楽しみに、まだ雪が残る信濃大町を後にし靖国神社に向かいましたが、そこでまず最初に叔父山岸昌司の同期生であった、故中西義男さん 中西義男さんは昭和十八年六月十六日にルンガ沖の航空戦で戦死された。の弟さんの中西明さんとお会いしました。同期の遺族の方とお逢いするのは中西さんが初めてでした。

中西さんを私に紹介してくれたのは、第二章で紹介した吉野さんでした。

吉野さんがお勤めの東京の出版社から出された本の中に中西義男さんの事が掲載されており、たまたまそれを見た弟の明さんが読者カードを出版社に郵送したことで吉野さんが中西明さんの存在を知る事となったそうです。

そして私に 乙六期の遺族の方が大阪に住んでいる。」と知らせてくだ

さり、中西明さんと手紙と電話だけの交流が始まりました。

平成二十六年八月頃、靖国神社から戦後七十年企画として「英霊に贈る手紙」の募集があり、中西明さんにもお知らせし、二人で応募したのですが二人とも選にもれてしまいました。五百八十通もの手紙が靖国神社に寄せられ、その内六十通が、後日書籍にまとめられて刊行されました。

でも応募された全ての手紙が神前に奉納されるとの事で、その奉納式が平成二十七年三月二十九日に開催され、それに出席するため靖国神社を訪問し、中西さんとお会いすることができたのです。

戦後七十年が過ぎ、叔父達が死んだらまた会おうと約束したこの場所で、約束どおりその遺族同士が会えるなんて不思議な気がしました。奉納式の後、遊就館を見学しました。会食の時には靖国神社の徳川宮司にお会いする事ができました。徳川宮司の叔父様も靖国神社に祀られており、毎朝拝礼をして手を合わせていると言っておられました。

十五時靖国神社を後にし、次の目的地である横須賀に向かいました。すがすがしい疲れを体感じながら。

昨年十月に厚生省にお願いした叔父の軍歴に関する書類が、今年二月に届き、今まで空白だった叔父の足跡を知る事が出来ました。

七十年前に叔父が辿ったその足跡を、今度は私が歩いてみたいという強い思いにかられました。

横須賀から霞ヶ浦へそして千葉県館山へと叔父の足跡を辿る私の旅は続いて行きます。